

# 慎一の青春

内田博司

登場人物	
吉村慎一	中学生 十三才
吉村孝造	運送店社長 四十三才
吉村房子	母親 三十八才
中橋定	天道教信者 六十五才
鈴木正治	寿荘主人 五十六才
村越銀次	宿泊人 七十才
西田芳	患者 二十一才
浜田武郎	患者 四十三才
牧野進	患者 二十四才
安藤静子	看護婦 十八才
中西美枝	教会若奥様 四十五才

時 昭和二十六年～昭和三十三年

所 東京都、昭和二十六年  
千葉市、昭和三十一年  
名古屋市、昭和三十二年  
奈良県、昭和三十三年

## プロローグ

本日は平成三十一年四月二十九日です。昭和天皇の誕生日ですが平成最後の月となりました。いよいよ五月一日から年号は令和となります。平成天皇は大東亜戦争によって失われた三百二十万人の国民を慰霊する旅を続けられた天皇として記憶されるでしょう。それ程に平成は昭和の清算を迫られた時代と言っても過言ではありません。

一つの時代が終わりを告げる時気持ちを鎮めて考えればおのずと浮かんでくる言葉があります。それは「命」という言葉です。その命について考えてみたいのです。

1

大東亜戦争は吉村一家にとってそれは長く辛い戦争だった。あれから六年、慎一は十三才になっていった。我が家にとっても大きな変化があった。慎一の父親は荒木運送の古参の幹部だった。会社は三越本店が見える昭和通りに面して巨大なガレージと事務所、社宅を構え日本橋、室町、堀留、小伝馬町、蛸殻町界隈の呉服、製菓、海産、貿易を商う商品の運送を一手に捌いて勢力を誇っていた。ところが物資流通が栄える今になって社長が突然引退を発表したから社内は上を下への大騒ぎとなった。今迄老舗の気風が漲って皆鷹揚に構えていたのに突然羽振りのよいお得意確保の争奪戦が始まり目を逆立てての争いとなっ

た。慎一の父親も穏やかな性格が徒となつて気がついたら草刈場の後に残っていたのは營繕を主とした建築資材関係の部門だけだった。いち早く繊維、製薬部門を傘下に収めた酒井俊平さんは

「吉村さん、残り物にはきつと福がありますよ」

と腰を低く挨拶すると早々に引き上げていった。社長の荒木さんが一番頼りにしていた部下だったが機敏にお得意様を巡つては対応策に奔走し結局はトラックも名義換えして自分のものにしていった。社長も指図するいとまもなくすがまに見送るほかになかった。自慢の一人息子だった昇さんがサイパン陥落後決起の特攻志願をして引き留める間もなく戦死してしまった。それからほろみみる元気をなくして程なく故郷の三重県に隠遁してしまつた。父親は社長から建設部門はこれから復興の時代だから勢出して働けとハツパをかけられ悩んでいたが顧客からの支援もあり中央区から隅田川を越えた江東区の河畔に借地権を得てトラック二台、運転手二人のささやかな吉村運送を誕生させることになった。

河口近くでは二百円を越える隅田川はさすが大川に相応しい流れで欄干から下を見てみるとさざ波が大きく波立って恐ろしいくらいだった。日本橋の下を流れる日本橋川は対岸で働く人の姿もよく見え河岸からボートに乗れたりして生活に密着した親しみがあつたが大川は行き来する船も大型で小さな家族が果たして無事に乗り切つてゆけるのか慎一には不安が一杯だった。

独立はまもなく大きな試練を押しつけてきた。トラックの維持費、従業員の給料、燃料の調達、顧客への挨拶回り、請求書の作成と集金、税務署の申告事務等しばしばその仕事の一部が慎一への仕事として回されてきた。父親が仕事に追いまくられるから夫婦喧嘩が多くなり母親が代わつて集金に行くのだが器用にこなせず結局慎一が集金も行かされることになってしまった。

玄関先に立つて「頂きにきました」と言う

「坊や、悪いな一寸待つてくれるようにお父さんに言つてくれないか」

と奥へ引つ込んでしまった。仕方なく慎一は貰うまでは帰えれないという素振りです立っているときすがに相手も玄関の扉を閉めるわけにはゆかず、奥の方で夕食が始まるのを黙って見ていることになつてしまった。向こうも払えないので応対も出来ず夕食の進行を只見ているしかなかった。陽が暮れてお腹もすいてくるし暗闇に立っているのが子供心にも悲しくなつてすこすこと帰路につくのでした。働いたのに集金出来ないことにとても納得がゆかなかつた。と言つて相手先も本当に払うお金がないように世の中の実態はとも複雑なのだと思つたが家も裕福な家庭ではないのでその矛先を何処へ向けていいのか慎一には解らなかつた。

しかし父親の同僚で製薬会社や繊維会社をお得意に譲り受けた酒井俊平さんは程なく日本橋に三階建てのビルを建てる話が伝わつてその資材運搬をすることになった。慎一もますます労務の手助けとしてトラックに乗ることが増えてきた。景気のいい家に集金に行く

と月末には請求と引き換えにすぐ料金を支払つてくれた。事業の善し悪しがこれ程明瞭に

なる社会が慎一には不思議に思えた。父親を一概に責められないとも思った。実は集金に行って手ぶらで帰ってきた時に

「料金が貰えないんじゃない意味がないでしょ」

と父親に文句を言ったところ父親は

「皆なお互い様なんだからそう責めるな」

と言われ悪い時ばかりではないのだからお得意様は大事にしなければならぬのかも知れない。そう自分にも言い聞かせていた矢先またまた難問が降りかかってきた。いやこれは自分にとつては災難かも知れない。慎一は十才の頃から読売巨人軍の少年ジャイアンツの会に入っていて月に一回皇居内広場で許可を取って練習し、毎年十二月には後樂園で川上や別所、内堀、千葉等と親善試合をしていた。今日は巨人軍と実際に試合が出来るメンバーの選考日に当たっていた。その練習日に父親から「大事なお得意の頼まれごとだから行ってきてくれ」と頼まれた。聞けば妹の同級で生意気な娘のいる人形町の有名なお菓子屋の仕事だった。仕事は仕方ないが知り合いの仕事だけは学校でからかわれるから絶対したくなかったし、第一練習日と重なるのだけは避けたかった。いくら大事な仕事だって子供の領分にまで踏み込んでくるのはルール違反である。それだけは守ってくれなくては困る。慎一は始めて父親に刃向かった。

「そんなの出来ないよ」

慎一はふて腐れて屋上の物干し場に隠れてユニホームに着替えた。父親が追いかけてきた。有無を言わず二の腕を捕まされるとそのまま階下まで引きつり下ろされた。

「仕事は引き受けてこそ商売なんだ。それが出来なきゃ飯の食い上げだよ」

有無を言わさなかった。自転車にリヤカーを結合すると商品の注文伝票を渡された。合羽橋の道具屋から人形焼きの金型を五十個引き渡す仕事だった。小口の配達にはまだまだリヤカーは重宝な車両だった。慎一は泣きべそをかきながらユニホームに野球帽を目深に被り昭和通りを上野方面へペダルを踏んだ。これで今年も後樂園では球拾いと見学に回される組になってしまった。

或る日建設会社から請求の水増しの要求があり、それを二日以内に作ってくれと父親から命じられた。仕方なく各項目を点検し水増しして請求書を書き上げ父親の印鑑を押したか書いている内に慎一はこの書き直した数字こそが我が家の請求する本当の請求としておかしくない数字だと理解出来た。家は何処よりも安くピンハネさせられているのではないか。その分我が家の収入は少なく貧しいのではないだろうか。正規ならばいつものコロツケばかりではなくたまにはトンカツも食べられるのではないか。考えている内に無性にトンカツを食べたいと思うようになった。

夏休みに入ると慎一はしばしば労働の助手に借り出されるようになった。

或る日朝早く起こされてトラックに乗せられた。車は長いこと走って千葉県の佐倉市に着き石垣のある広い坂道を登ったら立派な門が見えた。入ると広い敷地に幾つもの平屋建ての家が並んでいた。その奥まった一棟の前でトラックは止まった。五、六人の屈強な男達がその家を解体していた。有名な大日本帝国陸軍佐倉五十七連隊の兵舎跡であった。戦後六年も経っているのに無人だった家がまだ充分に部材は使えた。その積み上げられた柱や平板、軒板をトラックに積み込む仕事だった。とにかく数限りなくあるので休むことが出来ない程父親も汗ビッシヨリになって働いていた。慎一も負けずに懸命に働いた。ようやく荷台が一杯になったので最後の一本と思つて重かつたが角材を思い切り弾みをつけて放り投げたが頂上にまで揚げ切らずに逆に慎一の頭に落ちてきた。よける暇も無く目から火花が飛び出るほど痛くてその場に蹲ってしまった。ところが周りの大人達は腹を抱えて笑っていた。慎一は泣くことも出来ず落ちてきた角材を思い切り蹴飛ばしてやった。頭に大きな瘤が出来た。

一休みするとトラックは東京湾沿いの津田沼市へ向かった。戦争から帰ってきた兵隊さんも、心機一転して日本の復興に携わっていた。当然子供が産まれ子供達は学校へ入学した。各地方自治体では急増する子供のために小、中学校の建設に追われていた。これらの木材はそうして新しく学校へと生まれ変わるのであった。世の中は激しく動いていた。その流れに一緒に乗って行かなければ成長は出来ないものであった。その点で我が家は少し世の中の流れに乗り遅れているのではないかと慎一は思った。

働いてもそのお金が我が家に入って来ない顧客には遠慮してもらい、たとえ遠くても仕事に追われている顧客を探してそこへ我が家の車を全て振り向ける方が能率がいいのではないかと慎一は考えた。

或る日父親に言ってみた。父親は

「そんな木で鼻をくくるみたいにな義理が出来るか」

と軽くあしらわれた。

「でも家には車が二台しかないんだから無駄は出来ないでしょ」

「うるさい、お前は黙ってる」

と一蹴されてしまった。手助けにいつて頭に瘤を作る程働いたのに笑われるし、考えて意見を言えばキッチンと答えてもくれないことに腹が立ってきた。日頃母親がヘソクリにしている蓋を無くしたヤカンに金を隠して天井から紐で吊しているのを知っていた。慎一はヤカンを取り提げて中を確かめてみた。三万円近く入っていたので千円で一万円位挿むとポケットに入れた。

どうしても子供だと思つて小僧扱いするので父親に反抗しなくなった。野球に使っていたバッグからグローブやユニフォームを取り出すと代わりにシャツやパンツを二、三枚入れノートと筆箱を入れると風呂場へ行き手拭いを挿むと家を出た。

自分だつて働いて金を稼ぐ位は出来るんだ、と言うことを示したかった。何度も車の手

助けに乗っていて人間が足りない時は山谷へ行くのを知っていた。路上に群がっている人の中から意中の人を見つけるとその場を仕切っている頭領に話して金を払いその人達を車に乗せて現場へ向かうのを何度も覚えていた。

山谷へゆけば仕事と宿を見つけられるから自分でも一人前に働けることを証明して見せたかった。多少の金が入ったらトンカツでも米でも買って家へ土産にしたかった。とりあえず一週間働けば格好はつくと考えた。バスで秋葉原に出ると万世橋から三ノ輪行き都電に乗り三ノ輪から明治通りを歩いて泪橋に着いた。そこら一带は簡易宿泊所と飲み屋、食堂が軒を連ねて山谷通りの両側を埋めていた。ただトラックで人を募集に来た時と違っていざ自分の足で歩いてみると随分勝手が違って不安が募ってくるのだった。馴染みのない街に初めて入ってみた。平静を装ってそろそろ周りを見渡しながら簡易宿泊所が建ち並ぶ道を歩いていると突然声をかけられた。

「坊や、何してんだい」

見ると縁台の上に座って興味深げに慎一を見ている年寄りがいた。父親より大分年上のお爺さんだった。少し安心した。お爺さんなら悪いことはしないだろうと思った。

「泊まる場所を探しているんです」

「おお、上等だよ、此処がいいぞ、俺が話してやらあ」

機敏な動作で後ろの家へ入っていった。慎一がついて行くと

「おおい、親父泊まりだよ」

玄関を入ると目の前が帳場になっていて両脇に下駄箱が並んでいた。奥から四十過ぎの主人が出てきて

「二階五号室千五百円」

と言った。お爺さんが慎一に言った。

「坊や、お金あるのかい」

慎一はバッグの中から財布を取り出しお金を主人に渡した。主人は番号の木札をくれた。

「俺についてきな」

お爺さんは先に立って二階へ上がった。奥が五号室だった。二段ベッドが左右に並んでいて突き当たりの窓の下に台があり、その左右に二つずつ収納箱が並んでいた。そこに木札を入れた。

「そしたらまず風呂に入りな、気持ちよくなったら飯に行こうぜ」

お爺さんは親切に食堂迄付き合つてやる、というのでバッグから手拭いを取ると箱の中にもしまった。鍵は木札になっていて札を取ると鍵が掛かるようになっていた。慎一はお爺さんに案内されて階下の風呂場へ行った。人はまだ誰も居なくて湯気が立っていた。お爺さんは

「上で待つてるからな」

と言って出て行った。風呂場は六人ぐらい入れる大きさで身体を沈めると緊張していた気持ち少しづつほぐれてゆくのを感じた。大人の世界には勝手に入つてはいけないのだと思つていたのに自分の気持ち次第で自由に入ってゆけるのだ、と気がついた。今迄親の世話を受けているから意見を言つても採り上げて貰えず挙げ句の果て「黙っている」の一言で片付けられてきたが自分だつて一人で何でも出来ることに少し自信がついてきた。

明日は路上に立ちんぼに立つて人足の仕事を一人前にこなして旨い飯をたらふく食べてやる。普段母親の料理で旨いと思つたことが無かつた。第一米の配給が十分ではなかつた。

慎一は湯に浸かつてすっきりいい気分になつていた。

上機嫌で二階へゆくとお爺さんがいなかった。旨い食堂へ連れて行つてやると言つたのに居なかつた。急にお腹がすいてきた。窓を開けると夕方の暮れなずむ空が最後のひかりを漂わせていた。慎一は急に寂しくなつてきた。目の前は隣の家の壁になつていて街の様子は分ならず僅かに空が見えるだけだった。

仕方がないから一人で食べに行こうと濡れた手拭いを窓の手すりに干すと木札を入れて箱を開けバッグから財布を取り出した。

外はすっかり暗くなつていて様子が全く分からなかつた。明かりを求めて歩いて行つたら人だかりがして賑やかな人声が辺りに満ちていた。どの店にも人が混んでいてすっきり怖じ気ずいてしまった。用心しながら食堂に入った。どのテーブルにも人が座つていて大きな声で話し合つていた。暫く様子を見ていて壁際のガラス棚の中をのぞいた。様々な料理がそれぞれの皿に載つていてその前に金額が書かれた名札が付いていた。慎一は隅のテーブルに僅かな隙間を見つけるとガラス棚からまずトンカツを取り出してトレイに置いた。次々と食べたいものをのせると会計の台へ行つて財布を取り出した。

慎一は息が止まつた。お金が入つてなかつた。小銭すら無かつた。会計の店員が呆気に取られた顔をしていた。慌てて皿をガラス棚に戻すと店を飛び出した。どう走つたか夢中になつて宿泊所に戻ると帳場から主人を呼んだ。

「警察、警察」と騒ぐ慎一に出てきた主人が一喝した。慎一は声も無くその場に崩れ落ちて泣きたい気持ちを必死で押さえたが動揺が納まらず肩で息をした。

主人が静かに言い放つた。

「坊や、お前は家出してきたんじゃないか」

ズバリ言い当てられて驚いた。しかし黙つて俯いていた。

「元気は良さそうだけど此処はまだ坊やが来るところじゃないんだよ」

一番癪に障る言葉だった。自分は悪くないんだから説教されたくないかった。

「お金取られたんだから警察に電話したい」

慎一は必死に抗弁した。主人は黙って長いこと慎一を見つめていたがやがて

「もうあの男は見つからないよ、警察に届けたって無駄だよ」

「何故警察に言わないんですか」

主人はうるさそうに

「此処はなあ、そんな話聞き飽きてるんだ。警察だってうんざりだよ、分かってやれよ」  
全く納得できなかった。足りなかったら警察官を増やすべきだと思ったが言わなかった。

「おじさん、家に帰る電車賃貸して下さい。必ずお金は返しますから」

「その金はどうやって工面するんだ」

「お父さんから貰います」

「今日はお父さんに腹立てて出てきたんじゃないのか」

慎一は答えに詰まった。黙っていると

「折角飛び出してきたのにドジ踏んだから又金くれって言うんじゃないか」

そう言われればその通りだった。

「まあ、今日は折角宿賃払ったのだから一晩泊まってゆきな、晩飯はかかあにおむすびでも作らせるからよ」

そう言うとお奥に向かって大きな声で

「おおい、おむすび一個大きい奴作ってくんな」

やがて青海苔のいい匂いのする大きなおむすびを女将さんが持ってきてくれた。

「さあお食べ」

「今日はゆっくり二階で休みな」

慎一はおむすびを貰うと二階へ上がっていった。ベッドの端に座っておむすびを食べた。食べながらどうしても涙が止まらなかった。声を押して泣いた。

階下から屈強な男や痩せた男が上がってくるとチラッと慎一を見るが何も言わないでそのままベッドに倒れ込むと寝てしまった。すぐ鼾が聞こえた。おむすびはとも腹に滲みて旨かった。梅干しの種を長いことほおぼっていたが明け方グッスリ寝ていた。

明け方起きると部屋には誰も居なかった。どんな人だったかも顔もよく覚えていなかった。大事に持っていた木札の鍵はよく考えると扉の隙間からナイフ状の板を差し込んで上へ持ち上げると簡単に扉は開いてしまう仕組みだった。

階下に降りて流し場で顔を洗い帳場で主人を呼んだ。

「よく寝られたか」

主人はニコニコしながら出てきた。慎一はおむすびのお礼を言い

「すみません。お金を貸して頂けませんか」

小さい声で言った。主人は黙って慎一を見ていたがやがて

「お金は貸せないよ」

と言った。驚いた慎一は訴えた。

「僕、お金が無いんです」

「知ってるよ」

「えっ」

慎一は二度驚いた。

「坊や、お前働きに来たんだろ」

慎一は答えられなかった。

「何故、立ちんぼに立たないんだ」

「だって」

返事が出来なかった。

「此処へ来たなら此処の常識を覚えて帰りな」

三度ビックリした。

「此処にいる連中が雨で働けなかった時に金を作る方法があるんだ」

黙っている

「此処を出て左にずっと行くと土手にぶつかる、それが常磐線だ、金が無いんだからその土手に沿って左へ三十分位歩くと日暮里駅に出る。その広場の端に血液銀行があるからそこで血を採ってもらいな」

言葉も出なかった。

「簡単だよ、そうすりゃ旨い飯たらふく食べてお釣りが来るぞ、かならず年を聞かれるから二十才と書くんだぞ」

慎一は頭を下げると言われたとおり歩いて行った。土手沿いの道は遠かったが血液銀行は人だかりがしていてすぐ分かった。年齢には二十才と書いた。列に並んでいると名前を呼ばれ鳩小屋の鳩の出入り口のような窓に腕を出す

「比重が足りないとお金払えないわよ」

と言いながら注射器を刺された。消毒綿で差し口を抑えながら列に並んでいる人に比重について聞いてみると

「あまり血を採りすぎると献血に必要な基準に足りなくなるんだ」

その人は気だるそうに答えてくれた。蒼い顔をして疲れているようだった。

待っていると名前を呼ばれ千八百円をくれた。血を二百ccも取られたので早く栄養を補給しないと大変と思ひ食堂を探したが無かったので電車で上野まで行きトンカツと書いてある食堂に入りカツ丼を食べた。

家に帰ると両親に叱られた。だが山谷のことは一言も話さなかった。今迄通り労働の手助けには出たがもう何も言わなかった。世の中には見た目だけでは分からないことがたくさんあるんだ、と思ひ父親は父親なりに考えているのだと思つた。

たまの休みに父親は浅草へ映画に連れて行ってくれ、それが楽しみだった。父親は西部劇と任侠映画が好きだった。家では母親の方が口数も多くいつも愚痴ばかりいつているので家に居るよりは子供を連れて映画を見る方が気晴らしになると思つているようだった。慎一は強い鬱屈を父親が感じていることを悟ると父親を責めるより早く自分も社会へ出て家計を楽にしてやりたいと考えるようになった。就職はその為給料の高い会社を選び中堅の銀行に採用が内定した。安定した収入こそが生活の基盤であるとする考えに揺るぎは無かった。ゆとりのある生活にはまず貯蓄が出来て不時に備える準備が必要であり慎一はその実現に向けて働くことを人生の指針とすることに決意は固まつた。

リヤカーの小口運搬は社会の流通化が盛んになるにつれ結構便利な機能としてはやっていた。慎一もこれなら知っている子のいないお得意なら家計の足しになるので言われれば応じていた。自分なりに工夫してノータイヤの車輪を自分の小遣いでチューブ入りのタイヤに替えたりした。この方が格段に地面への接触抵抗が少ないので軽く速度も速くなった。初めは三角ベースでなければ乗れなかった自転車も少し背が伸びてサドルからペダルを漕げるようになって風が苦手では無くなった。隅田川を渡るときの爽やかな一陣の川風には思わず胸を反らせて口笛を吹いたりした。そんな或る日門前仲町の大衆食堂から歳末の室内飾り用品の注文が来た。これらは当然小口扱いで慎一に用件が回ってきた。慎一はリヤカーを自転車に付けると蔵前を目指して清洲橋を渡った。途中浜町から明治座の前を浜町河岸に移ると慎一の出た中学校が大川に面して建っていた。目の前で両国の川開きがあった時は生徒達はラムネを売ったり座布団運びを手伝ったりしたことが懐かしく思い出された。何艘もの船に仕掛けの櫓を組んで放たれる花火は江戸前の庶民の粋な威勢が何色もの彩りで夜空に弾け飛んだ。尺玉も何百発も打ち上げた。柳橋や芳町、浜町の芸妓組合から河畔沿いの料亭に何台も人力車が行き交い江戸の風情が匂い立つ風景だった。それも少しずつ消えていった。今は慎一の心の中にしか残っていなかった。

蔵前は人形問屋が建ち並ぶ浅草橋を過ぎると広い電車通りの両側が装飾品専門の問屋が軒を接して並んでいた。慎一は何度も来ているから微妙な材料がどの店に並べられているか分かるようになっていた。難しい選定品は注文主が現品を渡してくれるのでそれを売主に見せれば親切に教えてくれた。小半時もするとリヤカーが一杯になった。仕事の充足感が溢れてきた。慎一は熱気を冷まそうと帰りは蔵前橋を渡った。川風が冷たかった。その時突然胸にこみ上げるものがあり激しく咳き込んだ。喉が詰まったので勢よく吐いたら真っ赤な血が飛び散った。慌てて自転車をリヤカー毎歩道に上げると立っっていられなくて欄干に腕を預けた。血のついた涎が衣服の上を伝って川に落ちていた。慎一はノロノロとチリ紙で口も手も拭いた。遠くの総武線の鉄橋を電車がいつも通り渡っていた。慎一だけが非日常の中にいるみたいだった。急に寒さが這い上ってきてジットしていられず自転車を押して震災公園まで辿り着くとベンチに横になった。熱があった。心なしか呼吸がゼイゼイ止まらなかった。止まったら死んでしまうが心理的に切迫していると思いつち着こうと暫く横になったまま静かにしていた。人が近づいてきたのでユックリ起き上がり、なんとしても荷物は家まで運ばなくてはと必死に自転車を押した。家に着くと荷物だけは父親に引き継いで母親を呼び事情を話して医者へ行くと言った。幸い近所の医院は空いていてすぐさまレントゲンを撮った。血を採られ暫くベッドに寝ているように言われた。一時間後再び診察室に呼ばれ血液の沈行度とレントゲンと体温の結果から肺結核と診断された。痰も取られこれは保健所で検査して貰いますからと言

「暫く学校を休んで安静にし三日置きに通院して下さい」

と言われた。急に力が抜け何もかも御破算になったと思った。

家に帰ると早速屋根裏のガラクタを片付けてそこが慎一の寢床になった。壁と言っては粗末なベニア板で仕切られた殺風景な空間だった。残す三学期を全休しても卒業に必要な

出席日数はクリアしているので卒業は出来ると思っていたが今迄の全てが取り返しの付かないことになったことは事実だった。

体温は三十七、二度で少し微熱があるように身体中がだるかった。まだ寝る時間でもないのに布団を被っている状態がたまらなく馴染めなかった。息をするのにも生暖かいように気持ち悪かった。医師が父親に渡して欲しいと言われた手紙を読んだ。

「本日の治療費は子供さんの持参した金額では足りませんので後日子供さんに持たせて下さい。これからは一回に四千二百円ほど掛かりますのでご用意願います」

今回五千円を母親から貰って医院に行ったのだが足りないとするとその負担が父親に掛かることがとても心配になった。世の中お金が無いと普通の暮らしが出来ないことが痛切に慎一の心を痛めつけた。病氣もさりながら我が家の家計が気がかりだった。

母親は父親の力量の無さをなじるばかりで自分から工夫して生活を改善する能力は全くなかった。ただ一つ新興宗教の天道教にすがって暇があるとお祈りを続けていた。その母親を信させた定さんと呼んでいる人は六十を過ぎた年齢で息子は築地市場の仲卸の会社社長だった。その為生活には何の心配も無く好きな宗教に打ち込んでいられるのだが慎一は我が家の一大事の時に迷惑な話だと思っていた。宗教で病氣が治るなら世話は無いと思つた。その定婆が慎一にどうしても病氣平癒の祈願をやりたいと言いだし慎一は困惑して仕舞ったこともあった。

規則正しい生活と定期的な通院で慎一の体温は正常値に戻り身体の状態も普通と変わらない感じになった。保健所の検査も病原菌の体外発生は無く感染の恐れは心配ないと言うことで外出が許された。慎一は屋根裏が窮屈で毎日近くの図書館へ行って新聞を読み漁つた。新聞が慎一の教師になった。動けない分新聞が社会に開く窓になった。その内朝日新聞に森恭三という記者が目についた。この人の書く記事には最後に自分の名前が載っていた。世界中を飛び回って動乱の地から冷静な状況分析と的確な判断見通しを記事にしていた。格調の高い文章で坦々と仕事をこなしてゆく姿勢に驚異と畏敬を感じた。慎一は憧れた。この人の様に生きたいと思つた。

図書館の隣には清澄庭園と言つて三菱財閥を興した岩崎弥太郎が造つた庭園があつた。慎一はしばしば柵の破れから侵入して池泉回遊式の広大な庭園を散策すると心の安らぎを覚えた。池の周りには全国の特徴ある石の産地から糸目を付けないで集めた石を巡らせて配置されその造りの見事さに時の経つのを忘れて見惚れた。世の中にはこんな世界もあるのかと庭園という形で美しさを造形する人間の力に改めて深い畏敬の思いを抱いた。

図書館から気分よく帰ると家では案の定、父親が昼の仕事を終えて休む暇も無く夕食を食べるとソソクサと出かけては朝方帰ってくるようになった。母親に尋ねると

「お前の葉代にダンプの仕事をしている」

と言われた。朝鮮動乱後日本の経済は好転し東京中が建設ラッシュで至る処で工事が始められ父親はダンプで銀座の現場から夢の島への残土処理に従事していた。慎一はいたたまれない思いがした。すぐ下の妹は高校受験を控え、その下は小学六年の妹と三年の弟だが

三人とも事情がよく飲み込んでいるとは思えなかった。

同級の村瀬君が卒業証書を持ってきてくれた。村瀬君は大手メーカーに就職しクラスの四人が大学へ行くと言った。慎一を除き全員が就職内定したと言っていた。

村瀬君が帰った後慎一は自分の不運を嘆いた。四方八方全く出口なしの状態だった。憤懣を爆発させるにも身体が言うことを効かなかった。泣いてどうなるものでも無い。笑うには余りにも惨めだった。社会に一人取り残された気分だった。

とにかく父親の労働過重を改善する方策を立てねば我が家は崩壊寸前だった。焦りが慎一を駆り立てた。図書館の開架に区の広報誌がありそれを見ていると来年度の生活保護の予算が増額されると書かれてあった。区役所の住所を確かめるとそのまま図書館を後にした。区役所は広い貯木場を越えた先だった。都電を乗り継ぎ生活保護課へ行くと事情を話し援助を申し込んだ。風体をみて怪しんでいたが自分が本人だと訴えると係員は親切に対応してくれた。医療保護という制度があり父親の所得証明書と医師の診断書を添えて申込書に書いて下さいと言われた。慎一は早速税務署へ行って証明書を貰い医師に診断書も書いて貰った。申請書には病状を書く欄や申し込みを必要とする理由などあったが証明書で分かるのに、と思いつながらまとめるのに時間が掛かった。一週間もかかって区役所へ行って行った。係員は気難しい顔をしていたが受け取ってくれた。

「この病気は半年単位で経過確認がありますが国立療養所は何処も満員なので空き次第通知しますから待っていて下さい」

慎一は手続きが完了しやっと世の中の仕組みの中へ自分の力で参加することが出来て満足した。通知があるまで両親には黙っていて突然驚かしてやりたいと思った。

三月の末に生活保護課から千葉市の仁戸名療養所に入寮が決まったという通知書が来た。その夜、慎一は夕食が終わってから両親に経過を報告した。二人は驚いて何も言わなかったが安堵する空気が流れた。妹や弟もこれで家の中の重苦しさが少しは軽くなったとどこか安心する様子が伝わった。慎一もゆつたりした気分ですぐに寝た。

### 3

早速布団と生活用品は父親が両国駅まで運んで鉄道で送った。慎一は四月に入つてすぐバッグ一つを持つと自宅を後にした。父親は

「ゆつくり治して帰ってこいよ」

と言った。慎一は思わず振り返った。父親は軽く手を振った。穏やかな目をしていて。夜も昼も働いていることなど一言も言わなかった。父親の瘦せて尖った肩が目に焼き付いた。慎一は「どんなことをしても元氣になつて帰ってくるぞ」と心に誓った。

千葉駅を降りて広場から大網行きのバスに乗った。療養所へは三十分位で着いた。広い門を入り受付で入寮手続きを済ませると運搬車に乗せられ板敷きの渡り廊下を看護婦に押されて進んでいった。

事務棟に並んで図書室、講堂があり炊事室、洗濯室、浴場、焼却炉に続いて退所間近の

合宿を兼ねた訓練所があり職員寮があった。反対側には医務局、内科棟、医療機器室、外科棟、隔離病棟が並んでいた。病棟は木造二階建て十九室に看護室、対面所、隔離病室の男子棟五棟、女子棟五棟の大医療施設が広大な松林の中に点在していた。

やがて車は五号室に着き二階に上がった一号室の窓際から二番目のベッドに既に布団が運ばれていた。看護婦が在室の人に呼びかけ慎一を紹介した。慎一は最敬礼をして看護婦が敷いてくれた布団の中へ寝間着に着替えて潜り込んだ。天井には古い滲みが幾つも出来ていた。これからやつてくる前途を考えると目もくらむような不安が襲ってきた。しかし、どんなことがあってももう一度家へ帰らねばならないと考えていた。

療養生活が始まった。朝七時の起床から夜九時の消灯まで二回の安静時間の間に三度の食事があり自由時間もあった。規則正しい生活と特效薬ストレプトマイシンの効果もあって慎一の病状は徐々に回復していった。ただ右肺上葉部に残った影が無くなるか化石のようにならぬままに安定するにはまだ時間が掛かると言うことだった。

入所して一ヶ月経った深夜だった。大部屋のほずれに看護室があるのだがその奥には隔離病棟が五室あった。その各部屋は二十四時間監視の個室になっていて急病の患者や重症患者が入室していた。その三号室が俄に看護婦の出入りが激しくなり階段を上り下りする足音が続いたが明け方になって押し殺した泣き声が突然絶叫するような大声に変わって取り乱した足取りが続いたがやがて静寂が訪れた。

いつもと変わらない朝が来た。渡り廊下を歩く多数の足音が遠ざかっていった。食事運搬車は目の下を東から西へ移動しやがて西から東へ帰って行くのだがこの日の人々は更に西側に消えていった。その奥には霊安室があるだけだった。隔離病棟からは時々そうした慌ただしい動きが見られた。ここには大部屋の生活とはかけ離れた常に死を前にして厳粛な生命との争闘が行われていることを慎一は知った。やはり今迄の生活とは全く隔絶した世界が広がっていて、そこに今慎一がいることをまざまざと自覚させられた。朝食を終えて今朝ほどの隔離病棟のことが話題になった。突然大声を発したのは安藤静子さんであるとわかった。しかし原因は分からなかった。

一部屋八人で暮らす相部屋の南窓際にいる浜田さんは見るからに求道者のような雰囲気をつたえていた。髭を伸ばし寡黙で下世話な話にも一切乗ってこなかった。噂では敗戦もこの病棟で迎えた中国からの帰還兵とのことだった。或る日慎一が自分にもシベリアに抑留されたまままだ帰還しない親戚がいることを話すと浜田さんは慎一を見つめて

「そうか、大変だな」

と言ったときり何も言わなくなってしまった。どうしたんだろうと思っ

「俺も君位の時に三八式歩兵銃を担いで中国にいたんだ。戦闘で弾が飛んでくるとその音だけで縮み上がったもんだ。ところが隣にいた戦友が弾に当たって吹っ飛ぶのを見るとその血を見ただけで興奮して塹壕を飛び出すと大声あげながら敵陣に突入さ、夢中で銃剣振り回しながら何人殺したか分からないよ」

慎一は思いがけない事態に背筋がこわばった。

「今でも夢に出てくるんだぜ」

「これが戦争だよ、戦争なんてするもんじゃない」

浜田さんには訪ねて来る人がいなかった。きつともっと辛い経験が山程あるに違いないと慎一は思った。

西田さんは現役の大塚大学の学生であった。石川県の生まれで慎一はこの人によって大きな影響を受けた。図書室には慎一も良く通ったが西田さんは更にその上を行く丹念さで克明に各紙を読みあさり時にはノートを取った。投書で小遣いを稼いでいると聞いたが或る日西田さんから朝日新聞の投書「声」欄を示して「君も勉強のつもりで書いてみたら」と言われた。読んでみると自分でも書けそうな気がして試しに送ってみたが全然紙面には載らなかった。続けて書いたが全く音沙汰は無かった。投書欄は読者が日常の暮らしの中で思いがけない喜びや義憤に直面した時の素直な感情を新聞が読者に代わって掲載するのだから作爲の感じられる投書では当然却下されるとその時感じた。それでも西田さんの投書が掲載されるのだから慎一は正直凄いなと感じた。

牧野さんは二十五才で野球好きの鉄工所の溶接工でこの人が病気とは思えない元気者で隣と言わず別棟の人達とも交流があつてほとんど部屋に居ることが無かった。

近藤さんは税務署に勤める唯一の共済組合保険の患者でこの人の主宰する文芸誌「松籟」に度々投稿を勧められ慎一が山谷の経験を書いた「家出」が皆から褒められ近藤さんは慎一と同じ貧しい小市民の暮らしを丹念に書いていて涙が出た。何度も読み小説の持つ凄さに感服した。

安静時間が終わると時には裏庭の柵を抜け出して地続きの深い森に入り込んだ。そこを皆で散策するのが寝ているだけの患者にとって大きな気分転換になり貴重な運動となった。特に慎一にとつて歩けることの自由さが心の振幅を膨らませて必須の回復剤となった。療養所前の大塚街道を渡って十五分ほど歩くと小高い丘の森に囲まれた八坂神社に出た。つい身体を苛めたくて樹にしがみついて崖をよじ登った時土が崩れて右足を竹の切り株で切ってしまった。血がなかなか止まらなかった。

夜になって看護室へ行き嘘をついて治療を申し出た。夜勤の安藤さんは消毒液を塗りヨードチンキのあと丁寧に包帯までしてくれた。この時慎一は女性に初めて介抱されて癒やされた気分になり陶然となつているところへ

「あなたの作品読んだよ、よかったわ」

と言われ二度舞い上がってしまった。

「私も母子家庭だから気持ちが悪くわかった」

慎一も調子に乗って

「僕が入所してまもなく隔離病棟で岡谷祐司君が死にましたよね」

「あら、知ってたの」

「ええ、あの時もの凄く泣いてたの安藤さんだって」

「そうなの、祐司君と一緒に千羽鶴折ってたの」

「..」

「八百七十まで折ったのに祐司君の顔がだんだん土色になってきて息が詰まって」

「.:」

「緊急警報鳴らしたけど駄目だった。まだ十五にもならないのにね」

「大変でしたね」

そんな話をして慎一は病室に戻った。安藤さんの優しさが胸にしみた。ベッドに入って先程の情景を何度も反芻している内にととうと夜が明けてしまった。

患者にとって入浴は脈拍が上がるので制限されていて月に二回しか入れなかった。そのかわり週に一度看護婦によってベッドの上で身体中を温湿布清拭を施された。慎一はその清拭を安藤さんにやって貰いたいと思うようになった。しかしなかなかその番に当たらなかった。西田さんにも話してみたかったが恥ずかしかった。

その内検温で体温と脈拍を測定に来る時も気になってしまった。しかしこの場合は言葉を交わすわけではないのでアツという間に次の人に行ってしまうので触れあいと言ってもかすり傷のような味気なさであった。

月に一回の看護室における体重、肺機能検査、血沈測定の際は廊下に行列して測定を待つし看護婦も四人がかりで処理に当たるので運動会のような雰囲気でもとても静かな気分では無かった。時々廊下で安藤さんとすれ違う時は目が合うとニッコリ笑ってくれるけれどそれ以上話をする暇も無かった。追いかけて声をかけたとしても何を話していいか分からなかった。

こうして年は暮れ近藤さんを始め牧野さんは短期宿泊が許可されて我が家で正月を迎えることになった。浜田さんは故郷を話したことは無く西田さんは石川県と遠く慎一は家族に負担をかけるだけなので帰郷はしなかった。慎一も此処は仮の宿、早く身体を治して社会に出ることで自分の仕事と想っていた。

年が明けて患者を揺るがす大問題が持ち上がった。事務局から重症患者、共済組合患者を除く生活保護受給者全員に対し一人宛文書が届いた。四月から入所待機者が急増しているのもその解消策として全員に外科手術を優先し社会復帰を促がし厚生保護の実益を上げたいと書かれてあった。早速患者同盟が反対の意志表示をして医療技術者の増員と施設の建設促進を表明した。化学療法では回復のスペンが長期化し緩慢な結果しか望めないと厚生省は見切りをつけたのだ。しかし外科手術も肋骨を七、八本も切り落として肺の病患部を切除するのではと極めて原始的な手法で、あたかも戦場での応急手術のような現実死者が突出するのではとする意見もあった。

動揺は療養所全体に広がって朝から晩までその是非を巡る噂話で持ちきりとなった。事務局としても採否の期限を六ヶ月猶予して緩衝期間を設けた。

五月になって牧野さんが突然手術をして早く退所したいと言い出した。患者同盟は事務

当局の介入ではないかと騒ぎ出し盛んに牧野さんの慰留に務めたが父親も出てきて家族と相談した結果であり本人も見たとおり健康な人と見分けが付かない程元気なので患者同盟としても牧野さんなら手術に成功するかも知れないと様子をみることにした。事務当局もこれで弾みをつけて成功の試金石にしたいとする機運醸成に努めた。

手術は六月末に行われた。そのまま隔離病棟に入って事後の各種検査と応急処置が続いた。各病棟にも隔離室はあるが通常術後十日前後の差で戻ってくるのが普通だった。手術すると外科に隣接された緊急対応の隔離病棟で過ごすのは当たり前だが全く情報が外に漏れないので病棟看護婦でさえ経過は知ることが出来なかった。

しかし牧野さんは二週間経っても戻っては来なかった。一号室は沈痛な空気に変わった。噂が他の病棟にも伝わって自由時間になると見知らぬ患者が二階の廊下をうろろする人が増えてきた。患者同盟も反対に拍車をかけて動き出したので事務当局も遂に執行の一時休止を表明した。

そうした或る雨の朝、梅雨時だから当たり前のことだが午前の安静時間のことだった。いつもの昼食を運ぶ配膳車の渡り廊下を移動する重い引きずるような音では無く軽やかなゴムタイヤの音が静かに聞こえてきた。病棟の全員が耳を澄ませていつもと違う担送車の音を聞いた。その音はずっと五号病棟の奥へ消えていった。

その先には霊安室しか無かった。皆な一様に押し黙って音を立てる者は一人もいなかった。やがて昼の配膳車の音が聞こえてきた。

看護婦達はさすがに牧野さんの死を知っているが誰も何も言わなかった。患者達も誰も看護婦に聞いたはず者はいなかった。皆な廊下に停止している配膳車からそれぞれの食事を取りだして床頭台にのせると黙々と食べ始めた。

その夜、五号棟の主だった人達は並んで霊安室まで渡り廊下を歩いて行った。霊安室は六畳ほどの大きさを板敷きの台の上に棺が置かれていた。遺族として両親と兄が椅子に座っていた。僧侶はいなかった。一人ずつ台に進んで蠟燭に線香をかざすと灰台に立て焼香をして手を合わせた。牧野さんは安らかな顔をしていた。死ぬことだけが平安をもたらすのかと思える程穏やかで静かな時間が流れた。

部屋の者全員は翌日も告別式に参加した。棺は玄関まで担送車で運ばれて行った。皆な霊安室の前で見送った。声も無かった。

死は厳粛であった。患者同盟は手術の成功率は五割を下回っていると発表し方針の撤回を申し入れた。五号室では牧野さんがいつも野球解説で盛り上がっていたから今では火の消えたように重苦しい空気に包まれた。浜田さんは対象外だし、近藤さんは共済保険なので慎一達に遠慮しておさら黙っていた。

慎一は看護室へ行ってそれとなく安藤さんの勤務予定表を見て再来週の日曜が公休日と知った。ベッドに戻ると次の日曜の公休日に千葉の三越玄関で会いたいです、と手紙を書いた。そして安藤さんの夜勤日に一人でいる時を確認してソツと手紙を渡した。驚いた安藤さんが声をかけようとしたので口を手で封じて急いで部屋に戻った。掲示板に勤労感謝の日に講堂で「翼よ、あれがパリの灯だ」上映のポスターが貼ってあった。

慎一は牧野さんの死に衝撃を受けていた。何もかも貧弱な自分が手術をしたらたちどころに死を意味すると考えていた。その死をどうやったら回避出来るかあの日以来考え続いていた。手術を拒否すれば此処を出されるだけで無く医務局の方針に逆らったのだから医

療保護も受けられなくなるのは必定だ。そうなると再び元に戻って父親の負担が増えるだけだ。そうなれば家へも帰ることは出来ない。

万事休してしまった。隣のベッドは片付けられ今は空いたままになっていた。事務局としては次の予定者は決まっているのだが患者同盟との協議により方針の一時休止が実行されていた。

そうは言っても一旦国が決めた方針をそう容易く撤回するなんて慎一には考えられなかった。待機者が大勢待っている以上いざいざ崩れに国は実行せざるを得なくなるのでは無いのか。そうなら金も力もない自分は真つ先に犠牲にならざるを得ないのではないのか。慎一は考えあぐねた末に定婆のことを思い出し手紙を書いた。日頃定さんが家に来る度に嫌な顔をして何の役にも立たないと文句を言っていたのに突然の手紙で申し訳ありません。療養所において色々考えた結果お願いがあります。

「定さんが言っていたことを勉強したので名古屋の教会支部に入学出来るよう助言をして下さい。このことは親には暫く内緒にしてもらえませんか、後で私から説明しますから」

頭が混乱して文章が纏まらないけど手紙は出してしまった。突然のことなので承諾してくれるか確証はないけれど、このことに賭けるしか無いと決断した。

療養所の方針はよく考えたと国の施策の問題だと思つた。たとえ世の中に患者が蔓延しているとしても手術の為に肋骨を七本も八本も切り落とした上、肺の患部を切除する方法は医学的にも乱暴すぎると思つた。もっと一人一人の人間に対する治療として考えてくれるのなら化学療法は目下のところ最適な療法として信用できる。それを予算が足りないから手術と言うのでは従えないと思つた。その為に牧野さんのように死にたくはなかった。もっと自分の決断として人生を決めて生きたかった。

だからと言って家へ帰れば又父親が昼間の他に徹夜作業をしなければ薬代を稼げないとするなら慎一は定婆に縋って宗教に入る以外ない。父親に徹夜作業までさせないで済めばそれは慎一を選択として意義があることになる。今はそう決めて行動するしかない。そう決断するとストレプトマイシンは皮下注射なので指示に従うしかないが粉末剤のパスは自分の判断なので後日の為に服用しないで貯め込むことにした。医師の庇護から離れる不安は病人にとって死を意味する恐怖があった。この恐怖は慎一に極度の緊張を強いた。眠れなくなった。しかし今の状況で手術を拒絶し、父の徹夜を避けるには宗教に飛び込むしか道は残されていないなかった。人は最善でなくとも次善の道を選べる者は幸いだ。自分で自分の道を選べない者は地獄だ。地獄に立ち向かう強靱な意志はまだ慎一には持てなかった。只このままでは死ねない、と心の奥で燃えているかすかな灯りだけは消してはならないと慎一は奮い立った。

誰にも相談できないのでこの苦しさを安藤静子さんに聞いて貰いたかった。だから安藤さんに手紙を渡した時に定婆に相談しよう決めていたのだ。だから願わくは安藤さんと会えるときまでに定婆の返事が来てくれれば慎一の計画通りになると今はそのことを本当に神様がいるなら実現して欲しいと胸に手を当てて何度もお祈りをした。

そして久し振りに家にも手紙を書いた。大変なことは一切書かなかった。順調に身体は回復しているし事態をすっかり見つけ焦らずに前を向いて歩いて行きます。私のことは心

配ご無用ですから家のこと宜しくお願い致します。子供達のためにも喧嘩はしないで下さいと書いた。

療養生活は部屋の人も馴染んで表面的には穏やかな日々が続いた。熱もなく咳も出なかった。広い松林に囲まれた病舎の窓からは爽やかな風が吹き過ぎていった。このまま身体に異常もなく生活が出来たらどんなにか幸せだろうと慎一は思った。

待ち焦がれた定さんから手紙が来た。

「良く決心してくれた。名古屋には連絡したから安心して行って下さい」

と書いてあった。これで自分の行く道はこれしかないのだ、と思うことにした。これで安藤さんが本当に来てくれるか分からないがどうしても会いたい、と切実に願った。

先のことは分からないが家に帰れない以上自分を置いてくれる場所があるならそれこそ神の恵みだと定さんに感謝した。

日曜日が来た。慎一は看護室に外出許可の届けを出した。理由は生活用品の購入とした。入所する時は桜が咲いていたのでこれから出かけることを考えコートが欲しいと思った。家から僅かだが仕送りがあるがそれで足りるか分からない。

初めての外出だった。こんな日が来るとは思いもしなかったが門を出た時は大きな開放感があった。やっぱり人間は健康で自由であることが全ての出発点なのだと改めて実感し早く元氣にならなければと肝に命じた。

三越はバスを降りて近くの人に聞いてすぐ分かった。まず見切り品の格安市を探した。目指すコートはあったが金が足りなかった。仕方なくジャンパーとマフラーを買った。入り口に戻った。三越はどの店もライオンの銅像があった。日本橋ではお腹が空くと生鮮売り場でよく食料品の試食品を摘まんで歩いたことを思い出した。

安藤さんは来てくれるだろうか。恥ずかしいので通りの反対側で見守っていた。就職も出来ず中途半端な病人を誰も興味を持つ人なんていないと思った。でもこんな寂しい人間でも安藤さんと会って若いときの記念にしたいと強く考えていた。

待っているうちに同じ道を遠くから歩いてくる安藤さんを見つけた。二人は眩しそうに目を合わすと

「こんにちは」

と言った。慎一は小さな声で「有難う」と続けた。とても嬉しかった。身体中が悦びで膨れそうだった。二人は七階のレストランへ行った。慎一はカツライスを頼み安藤さんは天ぷらそばを注文した。慎一は怪我をしたとき包帯を巻いてくれて嬉しかったと話したらその先は話すことが無くなってしまった。

脱走する話をしたのに明るい昼間では話せなかった。結局映画を見ることにした。江原真二郎と中原ひとみの「純愛物語」を見ることにした。原爆を浴びた少女が少年が懸命に助けようとするのだが少年の願いや愛では到底助からない話で慎一は身につまされて泣いた。安藤さんも泣いていた。二人は離れたい気持ちになっていた。当てもなく歩いた。安藤さんは

「あんまり歩いたら身体に良くないわ」

と心配してくれた。慎一は黙っていた。どうしても話さなければならぬことがあった。いつのまにか公園に入っていた。池があった。ベンチがあり二人とも座った。

慎一は切羽詰まったように

「俺、死ぬかも知れない」

と言った。

「そんなこと言っちゃ駄目よ」

安藤さんが心配して答えた。

「だって牧野さんは死んじやったじゃないか」

「牧野さんは運がなかったのよ」

「俺だって運があるか分からないし」

「だからって死ぬと決まったわけじゃないでしょ」

「俺、逃げることにした」

「どうゆうこと」

慎一は経緯を話した。

「手術は強制じゃ無いのよ」

「でもしなかったら此処を出されてしまうだろ、俺は家へは帰れないんだ」

「駄目、家に帰った方がいいわ、家で絶対なんとかしてくれるわよ」

「家に帰ったら父親が又徹夜で働くしかないんだ」

「そうして貰いなさいよ、だってあなた病気でしょ」

「父親が倒れたら一家全滅だよ」

「どうしても駄目かしら」

「だから名古屋に行くんだ」

「えっ、何それ」

「宗教のお助け婆さんの本部へ行くんだ」

「もう止めて、なんとかならないかしら」

と叫んだ。

「もう決めたんだ」

慎一も叫んでいた。

「勤労感謝の日に映画会があるよね、その日の夜逃げる」

「止めること出来ないの」

「うん、だから千葉駅に来て欲しいんだ、そこで安藤さんとさよならしたいんだ」

安藤さんは黙っていた。そして慎一を見つめていた。

「映画会は七時に始まるから七時半に千葉駅で待つてるから」

安藤さんは慎一を見つめて黙っていた。療養所行きバスは入所者と会う可能性があるの  
で慎一は安藤さんに「先に帰って」と言った。安藤さんは暫く座っていたけど

「先に行くね」

と言って帰って行った。暗闇に消えてゆく安藤さんを見送って急に後悔にさいなまれた。  
もし安藤さんが事務局に話してしまったら計画の全てが破談になり、それ以上に自分の運  
命を自分の決意で決められないことになってしまう。

そのことだけは受け入れられない、と思った。  
しかしこの決意だけはどうしても安藤さんに聞いて貰いたかった。安藤さんは決して慎一  
の為に誰にも喋らないと信じた。

翌日安藤さんは日勤となり検温の時に体温計を渡され脈をとられた時も普段と変わらな  
かった。次々と患者を回りそのまま記録板を胸に掲げて隣の病室に消えていった。何も事  
態は変わっていき安静時間に入っても頭はこれから先の全く分からない不安と此処を出て  
ゆかねばならない決意とで一杯になっていた。安藤さんに話したがために計画は遂に自分  
だけの秘密では無くなっていた。慎一はそうすることによって自分の運命を投げたのでそ  
れはそれでいいと心では覚悟を決めた。

牧野さんのベッドはまだ空いていた。患者同盟との膠着状態で先に手を上げた方が始末  
を取らされることを懸念して互いに牽制していた。そのうち西田さんが来年の三月になっ  
たら結婚をし退所すると言い出した。それだけで判断の期限を延長できるので騒動の渦中  
に巻き込まれずに済むのでもいい考えだと思った。

西田さんは前から看護婦の藤川美奈子さんと付き合っていた。手術の話が持ち上がった  
から結婚を決意したと言っていたが学業はどうするのか聞いてみた。西田さんは「自分で  
もまだ分からない」と言い逆に投書のことを聞かれた。正直に話すと「では君の名前で朝  
日新聞の声欄に投書する」と宣言した。そんな簡単に実現するのかと思ったが翌々週宣言  
したとおり慎一の名前で「声」欄に投書が掲載されて驚いた。内容は核戦争に関する科学  
者の責任を討議したカナダのパグウォッシュ会議を取り上げて経済白書の「戦後は終わっ  
た」とする見解に疑問を投げたものだった。慎一は何度も読み直して自分はまだ勉強が足  
りないと思った。自分も身体を治したらどんなことがあっても早稲田大学に入学したいと  
思うようになった。実現したのは二十五歳だったが投書が掲載されるのもそれから三年の

歳月が必要だった。十月に入って新聞社から慎一宛に小包が届いた。開けると万年筆が入っていた。慎一の初めての万年筆だった。生涯に刻まれるべき記念の逸品になった。西田さんに礼を言う

「何事も決めたら途中で諦めたら駄目だよ。道はかならず開けるし駄目でも別の何かかならず君を助けてくれる筈だ、転んだら只で起きるな」

そういうとカラカラと笑った。慎一は凄い人だなと思った。ある時浜田さんから西田さんのことを聞いたことがあった。西田さんが始めて入所した日にお母さんが付き添っていて皆に挨拶したときに偶然自分が中国からの帰還兵だったことを話すと夫も中国戦線にいて南昌から急に南方に転進が決まってレイテで戦死したと聞かされた。そこで浜田さんは一息入れて

「君は知らないだろうがこのレイテ決戦は誤報に基づいて決められた作戦だったんだよ」と肩を落とした。慎一が次を待っていると

「台湾沖海戦で日本は敵空母を四隻も轟沈させたと打電されて大本営は確認もせずそれはレイテで一挙に米軍を殲滅させようと中国から兵員をかき集めて挑んだのだが逆に日本の航空機が四百機以上も撃ち落とされ敵空母は全くの軽傷だったんだよ、優秀だった零戦も遂にアメリカの新鋭機に刃が立たなかったんだ」

「・・・」  
「お父さんは折角転進してきたのに艦砲射撃で戦うどころか吹き飛ばされたんだよ」

慎一は言葉を失った。それでは西田さんは中学の時にお父さんを亡くしていたことに気づいていた。戦後も母一人子一人で生きる人生は慎一には想像もつかない程大変だったことに改めて西田さんを尊敬した。

慎一は西田さんに難しいお願いをした。逃亡の決意を話については家に帰れないので残る布団や生活用品について後で焼却を依頼した。西田さんは承諾してくれたが

「家に帰っても医療保護を受けられるように区に相談すべきだ」

と言ってくれた。慎一には区の決定に異議を唱えることになり自分にはまだ区に自分の意見を説得する力はないと思った。西田さんも無理には言わなかった。

近藤さんにも逃亡のことを話した。そうしたら永井龍男の「青梅雨」の文庫本を渡した。「何回も読んで勉強しろよ」と言った。その後何度も読む機会があるがなんでこの本をくれたのか未だに分からなかった。しかし永井龍男はその後の慎一にとって欠かすことのない作家として常に枕頭にあり人生の高い山として畏敬を忘れない人となった。

浜田さんにも話した。浜田さんは絶句してベッドの上に起き上がった。事情は全て察知していることが解った。

「そうか、大変だな」

慎一も立ち去りがたく佇んでいると

「此処にいるくらいなら早く社会へ出て行った方がいいよ」

と言った。浜田さんの言葉は重かった。浜田さんの心中を考えると浜田さんのどうにもならない心境が吐露されていて胸が騒いだ。

十一月三日、勤労感謝の日ビリーワイルダー監督の「翼よ、あれがパリの灯だ」が上映される日だった。慎一は夕食を食べると学生服とバッグを風呂敷に包むと寝間着のまま部屋を出た。病棟の脇で学生服に着替えると渡り廊下を通らずに門を出た。バスが来る迄松の後ろに隠れていてバスが来たので飛び乗った。さいわい見知った人は居なかった。千葉駅に着いたら安藤さんが先に待っていてくれた。悦びが吹き上がり思わず走っていた。

「気をつけて」

「有難う、又いつか必ず会いたい」

切符を買っていると安藤さんも入場券を買って改札を通った。

電車のドアに立って

「手紙を書くから」

「私も書く」

駅は夕刻の慌ただしい人の群れで混雑していた。

ベルが鳴った。

「じゃ、又ね」

と言ったとき安藤さんが飛び乗ってきた。

ドアが閉まり電車は動いた。慎一は思わず安藤さんの手を握っていた。

二人は宵闇に暮れた街を眺めながらずっと黙っていた。

船橋に着いたとき

「もう帰らないと」

と言うと安藤さんは

「大丈夫」

と言った。二人はドアの側に立ったままずっと外を見ていた。秋葉原について山手線に乗り替える為電車を降りると

「東京駅まで送ってゆくから」

と安藤さんが言った。慎一は嬉しかった。これから先の不安を一掃してくれる程の力を貰った。二十一時発の福岡行きに乗った。

これが本当の別れになるのかと、と思って慎一はしっかりと安藤さんを見つめた。安藤さんはバッグから何かを取り出すと慎一の手に渡した。見ると護国神社のお守りだった。

「今日、早く行って貰ってきたの」

と言いつつと手にしていた袋を渡して

「これ、身体にいいから呑んで」

と言った。

「本当に有難う」

ベルが鳴った。

「元気でね」

「あなたもね」

列車はゆっくりと東京駅を離れた。

安藤さんはずっと胸の前に手を合わせて見つめていた。

慎一はいつまでも手を振った。

やがて見えなくなった。

4

慎一は座席に座ると袋の中を開けてみた。栄養剤が一杯入っていた。慎一は目をつぶってその袋を抱きしめた。ギュッと抱きしめた。前途の不安を吹き消すようにずっと同じ姿勢で座っていた。

名古屋へは明け方着いた。ホームの流し場で顔を洗い定さんが送ってくれた支部教会への案内を眺めた。まだ通勤客のまばらな構内を抜けバスの発着所を探した。東山動物園行きバス停で待っているとバスが来た。出発する頃には座席が埋まる程の人が乗ってきた。途中繁華街を通るのか人が代わる代わる降り降りした。さすが大きな街だったが終点ではさすがに慎一一人だった。大きな通りを何処までも歩いて行くとやがて右手に大きな看板があった。「天道教香安大教会名古屋支部」と書いてあった。坂道を登ってゆくと大きな

玄関があった。来意を告げると若いハッピを来た人が現れた。

「東京の定さんに紹介されて来ました」

若い人はビックリして奥へ引つ込んだ。広い畳敷きの隅に待っていると大分年を経たお婆さんが出てきてジツト慎一を見ていたが

「あんたの病氣は贅沢病や、うんと旨いもの食べてからに働かんと何もせんでただ息してるだけや、そんなんにかかる人は最も根性の腐ってる証抛やぞ、そんなん人は人様の最低の仕事から始めるもんや、まず朝四時に起きて便所掃除しい、それから文句を言わんと真面目に働けばきつとようなる、今日から励めや、なあ」

それだけ言うと行ってしまった。奥の方に神殿と左右に格式のある社が並び神楽の道具が置かれていた。やがて当主の娘さんらしい年配の人が現れた。

「あんたよう来たね、定さんが心配しとったからあとで手紙でも出しときなさい」

慎一は「はい」と返事をし頭を下げた。

「さっきの人は私のお母さんで教会長の奥さんや、日常のことは私の担当にするから、何でも相談しなさい」

と奥へ引つ込んだ。代わりに事務担当の若い人が本殿の裏の部屋に案内した。八畳の畳敷きに押し入れがあり壁際に十個程のロッカーが並んでいた。

「布団は押し入れでロッカーは空いているとこ使って、これから君の職場へ行くから」

渡り廊下を通って長い洗面所の奥に十五位並んだ便所と男子小用のトイレ棟があった。枯れ葉が舞い風がふき抜ける木造の建屋だった。若者は帰っていった。

見渡すと殺風景な眺めだがこれが慎一の新しい身の置き場所だと思ふとひとしおの感慨があった。療養所と違って身体の底から力が湧いてきた。心の中で定さんに感謝した。

夕方、神殿に皆が集められ教務担当の樋口さんが慎一を皆なに紹介した。慎一は頭を下げて「お願い致します」と挨拶した。

今日から慎一は修養課の学生となった。修養課は三十才の緒方さんを始め二十六才の加藤さん、二十二才の宗方さんと慎一だった。年の差もありそれぞれ事情を抱えて此処へ引き寄せられた人達の暗黙の了解は不干渉だった。一切の出生、門地、経歴については関知せず、がルールであることが一緒に寝起きする内に分かった。それ以外は明るく親切で協同作業には障害もなく円滑に生活が進んでいった。

朝四時に起きると箒で掃いてその後雑巾掛けだが板が荒目の鉋掛けしかしていないので雑巾が板目に引っかかり滑るようには雑巾が走らなかつた。つい絞り方をゆるめて掃くと

水がビッシヨリ残って気持ち悪く悪戦苦闘した。一番困ったのは汲み取り式の便所がズラツと並んでいて板の下は文字通りの便でそこから這い上ってくる風がヒヤリとして首筋に纏わり付くのと匂いがきつく思わず息を止まった。それが十五個もあるので耐えがたい上に踏み板に粗相が一杯あるので別の雑巾を用意しないと清掃にはならなかった。

七時に勤行が始まり教務担当が読経して皆なは後に続いて声を上げて経を読んだ。この時は気持ちが一つになるので身が引き締まって気持ちよかった。

七時半に食事が始まった。全員アルミ食器だった。飯粒が見えずサイコロ状のサツマイモが盛り上がっていて味噌汁は大根の葉で東京と違って名古屋味噌だった。オカズはオカラとそして漬物は大根だった。慎一は味噌汁でかき込んだ。

一旦宿舎に引き上げたが慎一一人学生服なので緒方さんがロッカーから作業服を引っ張り出してきて「これに着替えな」と渡してくれた。結局長靴を履いて後についてゆくと神殿の裏は見上げるような山が目の前に迫ってきた。それを崩して谷底の低地に埋め地面を平らにするのが修養課の仕事だった。内心慎一は生きて帰れるのかと山を見て信じられない程の落胆に陥ってしまった。しかしこれが自分の行き着いた道ならば仕方ないと思った。病気のことは一切話してないのでやるしか無かった。慎一は怠けていると思われるのは耐えられないので歩調を合わせながら尚且つゆっくりと動作だけは休まずに作業に取り組んだ。喉が渇くとヤカンから水を飲んだ。猫車という車輪の付いた台車に山を崩してはその土を谷へ投げ込む単純な動作の繰り返しだが山から谷へ移動する過程がなぜだか知れず自分の罪障を何から何まで洗い出してくれるようなまるで滝に打たれているような清浄観に満たされてくるのであった。不思議な感覚であった。

労働はお腹が空くと同時に激しい疲労に襲われた。肉が欲しかったが出されたものは一生懸命食べた。疲れているので食後の読経と経典講義は眠くて仕方が無かった。夜は九時に寝た。朝はキッチンと目が覚め便所掃除も要領を覚えて生活のリズムが出てくるといつか病気のことには気にしなくなっていた。ただ栄養が足りないと思うので安藤さんの栄養剤は本場に頼りになった。その位病気を気にしなくなったが決して油断は出来ないので毎日脈拍を測ったり昼休みも安静にして体調維持に努めた。

仰天の名古屋生活もどうか慣れた頃初めて父親に手紙を書いた。定さんの御陰で新しい生活にも慣れ病気も大過なく元気で暮らしています。どうか心配なくそちらも身体に気をつけて下さい、と書いた。

毎日挑んでいる山は一向に削れた気がしないが谷には少しずつ土が盛り上がって来てそれを均すときに達成感が湧き仕事の励みとなった。

一ヶ月経った頃若奥様から

「便所はキレイになったね」

「有難うございます」

「今日から便所の他に風呂当番もやってみなさい」

といわれた。神殿の横の教会長宅に直結して大きな風呂場があった。重油式のポイラーで炊くのだが住み込みの布教師である田中さんが操作を担当していたが引き継ぐことになった。作業を四時で切り上げると風呂場に来て油量を確認しポイラーに点火し自動の温度調

節を監視する仕事だった。止めるのは九時で就寝時間になるがその作業を終えてから寝ることになった。重労働を一時間切り上げ日当たりのいい操作室でボイラーの面倒を見るのは自動式なので監視さえしつかりすれば安全だった。この部屋は教会長宅につながっていて若奥様から弟の部屋の本を見て良いと許可が出ているので弟さんの部屋に入った。弟さんは大学生で本棚に本がズラリと並んでいた。慎一はそこから岩波書店の「芭蕉文集」を取り出すと操作室に戻り熱量を監視しながら読み耽った。野ざらし紀行に

「富士川の辺に行くに捨子の哀れげに泣くあり。汝ちちにくまれたるか、母にうとまれたるか父は汝を憎むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ唯是天にして汝が性のつたなきをなけ」

読んでいてついつい本にのめりこんでしまった。芭蕉の心が慎一の心に滲みてきて胸が詰まった。慎一は富士川の辺に捨てられた子供と同じだと思った。右も左もわからぬ名古屋のどんずまりの天道教の風呂場でこうしている自分にしみじみと打ち捨てられた孤独を感じてしまった。初めて慎一は自分の存在を自覚したような気がした。

冬が来た。教会の正月は素晴らしい経験となった。着飾った信徒さんが朝から引きも切らずやって来ては参詣を済ませると神殿前の広場にテントを張って特設した畳の上でお雑煮を食べると嬉しそうに帰って行った。大晦日に修養生と炊事班が代わる代わる餅をつき北海道の昆布と高知の鰹節と煮干しで出汁を作りテントの横に並んで炭火で顔中真っ赤にしながら餅を焼いた。その隙を見つけては雑煮を食べた。こんな旨い雑煮を慎一は食べたことが無かった。生まれて初めて味わう美味だった。名古屋の大きな自動車会社が毎年寄付してくれる進物だった。

二月になり朝の便所掃除は雑巾が凍って水道も出ない日があった。その時は風呂場から水を汲んで作業をした。朝食が終わって山崩しの作業の前に若奥様に呼ばれた。

「どうや、この生活にも馴れたやろ」

「はい」

「今度奈良の専修科に行ってきない、全国から人が集まるで揉まれてくるといいが」

「えっ、すぐですか」

「すぐに決まっとるがや」

「人はなあ面と向き合ったら互いに挨拶するのは当たり前じゃ」

「そうですね」

「だがな本当に偉い人間は通り過ぎた後ろ姿に頭がさがるんや、そんな人に会ってこい」

慎一は若奥様の顔を眩しそうに仰いで「はい」と言った。慎一には目下の宛てがなかった。その日、その日を夢中で生きるのが精一杯だった。しかしこの一年を振り返って自分でも分からない大きなものに動かされているような気がしてならなかった。その大きなものが何なのか慎一には分からなかった。その風に吹かれていつの間にか病気を忘れていたことに気がついた。あれ程「死」を恐れて翻弄されていたのに今ははっきりと自分という存在を自覚して、そのことを考える日が多くなった。

急に安藤静子の面影が頭に浮かんだ。病気に失意して落胆している時は思い描くだけで胸が熱くなったがようやく人並みとはゆかなくても身体を動かせる今ではそれ以上に焦がれる程胸が締め付けられた。一緒に歩いた道や映画を見た時の一コマ、一コマが想いだされて来るのであった。護国神社のお守りもバッグに仕舞ってある。慌ただしい東京駅での別れから慎一は今名古屋を離れようとしているのだった。

寒気がひとしお深まった二月末、慎一は京都に向かう車中にいた。山科を過ぎ鴨川を渡ると京都である。修学旅行で来た以来だがすぐ奈良線に乗り換え午後宗邦市に着いた。

市全体が宗教都市だった。藍色の法被を着た信徒が大勢行き来していた。軒を接する店も法具、祭具を並べていた。やがて長い塀に囲まれた広大な門を潜ると重厚な瓦屋根の館が建っていた。玄關で入学証を渡した。係員が長い廊下を先導して六畳ほどの部屋に案内された。そんな部屋が遙か向こうまで続いていた。部屋には四つ机があった。そこに座り机に手を置いてみた。ヒヤリとした感触が伝わってきた。

百人は入れる食堂で互いを知る間もなく食事を摂った。その後大広間で就学の説明があり相部屋に戻ると二十代そこそこの四人が集まった。大阪と兵庫県、島根県と慎一だった。それぞれの出身地で同じような経験をしている者達だった。

翌朝、法被姿になった一同は二十人ずつ隊列を組んで教育学館に向かった。学校と変わらぬ風景だった。四十人ずつに分かれて教室に入った。机の上に五、六冊の本が置かれていた。本をめくったりしていると法衣を着た教官が入ってきた。

新しい生活が始まった。

教官は教壇の前に立つと大きな声で

「信仰は教義と実践を通して神の真義に触れ自らの生きる指針とすることです。毎朝七時の本殿参拝に参加し宿舎に帰って食事を摂り再びここに帰って九時から授業です。目の前の本は月曜から水曜まで集中して講義なのでかならず予習をすること。木曜日は午前中ここで本殿教義に参加し午後は本殿に行って信者の邪魔にならないように本殿内の各部の実技と清掃に当たります。金曜日は午前中実践部門である米作、農業、酪農の講義を受け午後は各実践場で担当者から指導を受けて下さい。それら全てが本義信仰の根本であるから実技習得に邁進して下さい。その成果は終了後全国の支部に派遣され布教に活かしてこそ専修科の理念は發揮され一粒万倍の種が花を咲かせるのです。今から励んで下さい」

慎一は静かに聞き入った。

窓の障子に朝の光が射してきた。

## 5

毎日弁当を貰って隊列を組み教育学館へ向かうと商店や民家の人々が挨拶をしてくれた。こうした風景がこの町では当たり前のように溶け込んでいるのだった。慎一にとつてこの暮らしは有り難いことに病氣に対して常に注意していたの時には忘れてしまう程身体への不安は薄れ目が覚めて寝るまで気に掛からなくなっていた。従って天道教に対する感謝、名古屋の若奥様への感謝と定婆さんへの感謝は毎日の本殿参拝にもかならず声を出して唱えているような日常であった。

ただ経典も最もな教えであるし疑うことも無いが是を一生の仕事とするかについては本  
当に自分は帰依しているのか、真底から全霊をもって打ち込めるのか、と言う点で今ひと  
つ信じられないでいるもう一人の自分の存在を消すことが出来ないでいた。

金曜日の実践道場では今田植えの真つ盛りだった。慎一は米作部門担当の中川さんの指  
示で苗を持っては田に入り一株ずつ苗を植える作業に従事した。ひと畝植えるだけで汗ま  
みれになったが気持ちよかった。身体一杯に生きる喜びが漲ってきた。こんな生活もいい  
なとしみじみ思った。休憩時間になった。

畦道に腰を掛けて休んでいると目の前の道を頭陀袋を提げた坊さんが通りかかった。慎  
一は思わずその様子を眺めていた。

坊さんは大きな農家の入り口を覗いた。誰も出てこない。横から箆を腰にのせてその家  
の家内が出てくると

「昼日中百姓の家覗いたって誰も出てくるもんはいねえぞ、皆な働いてるだ」

慎一にもその声は聞こえた。坊さんはしきりに恐縮しているふうに見えた。家内は脇から  
小さな袋を突き出して

「これ少しばかりだけど持ってけさ、小豆だけどアンコにして食べれば旨いに」

「有難うございます」

坊さんが答えた。

「そうやって一人で歩いてんのも疲れるべ、箆の上へと寝ていけばいいさ」

「いや、とんでもないです」

「怒られるのけ、そしたらこと疲れたら休めばいいさ」

「はあ、玄関先で悪いけど一寸食事させて貰えませんか」

「飯まだだったのけ、ほんじゃ茶っこあげるべいよなあ」

と奥へ入ってゆく。坊さんは座ると頭陀袋に小豆を入れ、竹皮に包まれたおむすびを取り  
出し口に入れた。坊さんはお腹が減っていたのだ。もぐもぐ食べた。

家内が盆にお茶と漬物を載せて出てきた。

「さあ、お茶啜ってお天道様に感謝して飯食べれ」

「有難うございます」

家内は空を仰ぎ

「いい天気だこと、有り難いこつてすわなあ」

そう言うと奥へ消えた。

慎一はずっと見ていて坊さんが食べ終わった頃を見計らって声を掛けた。

「ご苦労様です」

坊さんはフト見て天道教の人と分かる

「はあ、お互い様です」

「これを毎日お勤めですか」

慎一が問うと坊さんは初めて慎一を眺めた。三十過ぎの壮年の坊さんだった。

「これは奇遇ですな」

慎一は興味を持って尋ねた。

「何故ですか」

「私は一瞬前迄あなたを知らなかった。それなのに今こうしてあなたと話をしている」

「これが縁です。三経義疏に曰く、会い得ずして既に会うことを得たり、私とあなたは今縁をもって結ばれたのです。その先どうなるかはわかりません。ただ私達は仏の縁をもって会う筈もないのに会えたと言うことです。お大事に」

坊さんはそう言う立ち去った。慎一は何が起こったのか掴めずに坊さんの後を目で追っていた。坊さんは一体何を言いたかったのか。

6

慎一はこの街が好きになった。ここにいとさかいというものを見たことが無かった。両親でさえ毎日暮らしのことで喧嘩が絶えなかった。そのことが慎一にはとても辛かった。生きていることが何故楽しみにならないのか。慎一はここにいる御陰で悦びすら感じていた。こうして一生暮らせるならこれ程幸せな人生はないと思った。

休みになって慎一は食堂で朝食を食べながら今日はこの間あった坊さんに会いに行こうと思った。宗教の道は違うがあの人と言った「縁」についても少し聞いてみたかった。道順はその時間いて漠然と想像がついていた。今歩くことがとても気持ちよかった。街は道路一本外れるとそこには水田や農地が広がっていた。田には光を受けて稲が勢いよく育っており蛙が泳いでいた。のどかな風景は慎一の心を弾ませた。目指す寺は深閑としていた。参道を進むと頭に手拭いを巻きザルを傍らに置いて雑草を摘んでいるこの間の坊さんを見つけた。挨拶をするにこやかに作業を止めて「又会いましたねえ」と言った。

慎一がこの間の続きを聞きに来ました、と言うとザルを持ち庫裏の入り口で手を洗うと傍らの縁台に腰を下ろした。慎一も並んで座ると

「生も一時のくらいなり、死も一時のくらいなり、たとえば冬と春のごとし」

坊さんは経で鍛えた喉で鮮やかに口唱した。慎一が感心していると

「もし生命というものがあんならばこの現実の世界においてこそ一瞬、一瞬を充分に生きること、それが今ですよと教えている」

それだけ言うと坊さんはニコニコして慎一を見つめた。そして

「君は今迷っているのじゃないか」

そう言われて慎一はドキツとした。何故か心の底を見透かされた気がした。

「まあいい、決めるのは君だ」

言葉を継げないと坊さんは

「停留より飛翔、又会おう」

といって庫裏の中に消えた。慎一は頭を下げるとゆっくりと寺を後にした。

「生も一時のくらいなり」と心の中で繰り返した。

夕暮れの田園風景は甘やかな風が鼻をくすぐった。蛙の鳴き声がしきりに聞こえてきた。

慎一は次の日から勤勉に授業についていった。機械のように消化して頭が一杯になると次の休みには電車に乗って奈良に行った。

奈良はもつと好きになった。志賀直哉の家とか、小林秀雄の宿屋、特に好きなのは興福寺の北円堂だった。そこには運慶の彫った無著、世親像がありこの二像を見てみると人間の悲しみを乗り越えた諦観がジワジワと寄せてきてそつと包まれる感じがするのであった。この揺るぎの無い静かさが慎一にはたまらなく魅力的だった。

この日も猿沢の池を抜けて古びた町並みを歩いて昼間なのに暗い電灯を灯した古本屋に立ち寄った。道路にミカン箱を置きその上に平板を渡して本を並べていた。慎一は何気なく一冊を取り上げた。表紙にはアルペールカミュ「シジフオスの神話」と書いてあった。本を開いて見出しを見た。そこにはこう書かれていた。

「哲学の根本的命題は一つしかない。人生が生きるに値するか否か、それを問うことだ」

慎一は雷に打たれた。暫し動けなかった。次に奥へ入って行きその本を買った。二十円だった。慎一はそのまま駅に向かい電車に乗った。車中ずつとその本を読んだ。

宿舎についても翌日の教育学館での授業でもこの本を離さなかった。慎一は天道教に救われ天道教に抱かれて人生を歩もうとしていた。しかし人間の有りの儘の姿がこの地球上に生み出された時地球上に何の手掛かりも無くひとり泣いている姿が人間の真実の存在なのではないか。人間は名前もなく生まれ何の手掛かりもなく生き、そして何者かになる道が人間の運命なのではないか。

手掛かりは何もない。それは自分で作るしかない。

しかし、慎一は天道教の定婆に救われそして名古屋の若奥様に救われて現在の慎一があることを考えた時感謝を忘れ恩返しを忘れていいのだろうか。

結論は出なかった。慎一は悶々として日を送った。早朝参拝には誰よりも早く出かけて無心になって読経を続けた。朝の行列登校もそして授業も姿勢を正して臨んだが心中は揺れ動いていた。夕方寮に帰ると家から手紙が来ていた。母親からだった。

内容は動転するものだった。珍しくお得意から仙台迄の直行輸送を頼まれ前日夕刻には二台共荷物を積んだまま早朝出発の積もりで前の道路に止めていた。朝起きると車が二台共盗まれていた。警察に連絡したが未だに発見されずとうとう父親が倒れ寝込んでしまったとのことだった。慎一はすぐ寮に頼んで長距離電話を掛けた。母親は沈み込んだまま「どうしよう、どうしよう」と言うばかりだった。取り敢えず荷物についてはお得意が保険を掛けていたので負担は免れたが当面の輸送は父親が知り合いに代行を頼んで了承されたので今は車が早く見つかることと父親の健康だった。幸い父は一時の過労で倒れたが今は少しずつ回復してきているとのこととひと安心だった。

考えもしないことが起きてしまった。まさか家のことは今の今まで頭には無かった。自分の進路のことで胸が一杯だったので家のことなど考えもしなかった。どうして人生って一度に色々なことが起きるのだろうか。

慎一は久し振りに安藤静子に手紙を書いた。

「ご無沙汰しています。栄養剤有難うございました。僕もなんとか生きています。今度東京に帰ります。帰ったらすぐあなたに会いたいです。会ってくださいますか」

慎一は手紙を書き終わると寮を出てポストに手紙を投函するとひとり本殿へ向かった。巨大な本殿は夜の闇に沈んでいた。この時間でも信者は何人か吸い込まれるように入っていた。慎一は本殿と対峙して立った。威圧するように覺が迫ってきた。自分は今迄多くの人々に支えられて生きてきた。自分は一個の小さな存在にしか過ぎない。けれどこの身体の中に流れている血は自分だけのものだった。自分の中の五臓六腑が自分を動かしている。これが真実の姿であるならばこの人生が生きるに値するか否かは自分で決めるしかない。慎一は目をつむって時を刻むように規則正しく授業に没頭した。三日後安藤静子から手紙が来た。

「私も元気です。勿論私も会いに行きます」

文面を見て心が躍った。慎一は東京へ帰ろうと決心した。

盗まれたトラックは一週間後千葉県船橋で二台共発見された。荷台は空だった。

両親が苦闘する社会とそして安藤静子が生きている街こそが慎一の生きる場所なのだ。

終わり